

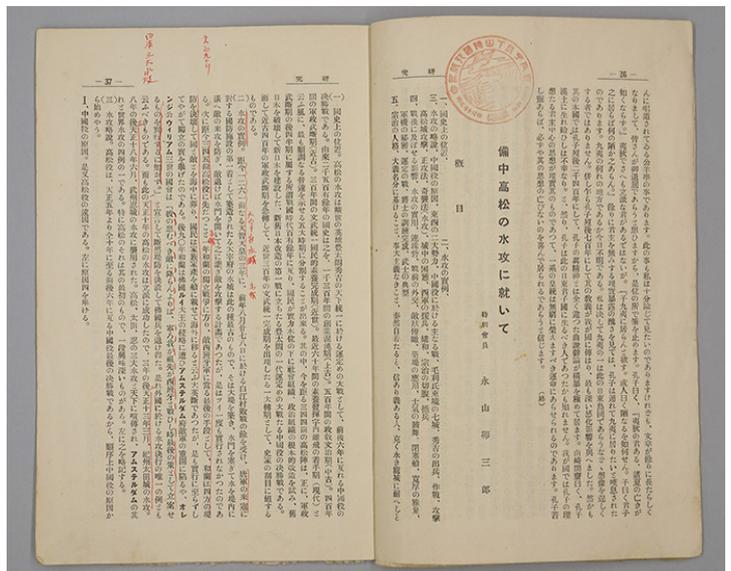
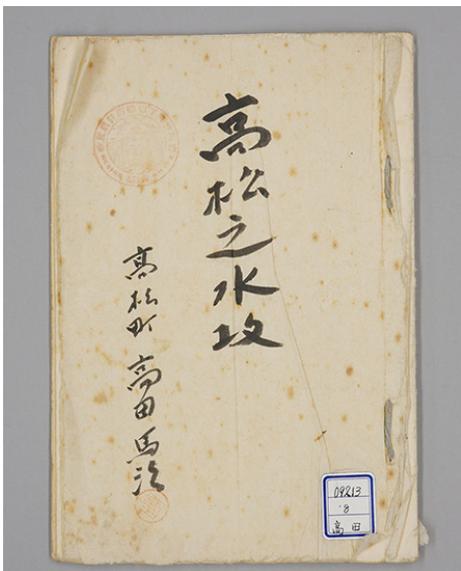
5-3 原秀四郎（著）、高田馬治（写）「高松城の水理に就て」

『史学界』第6巻第9号所収

明治37年（発行）、昭和9年（写）25.0cm × 17.0cm 表紙および18丁

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/7）

水攻めの際の高松城と長野川の水位について論じた学術論文を、高田馬治が筆写したものです。



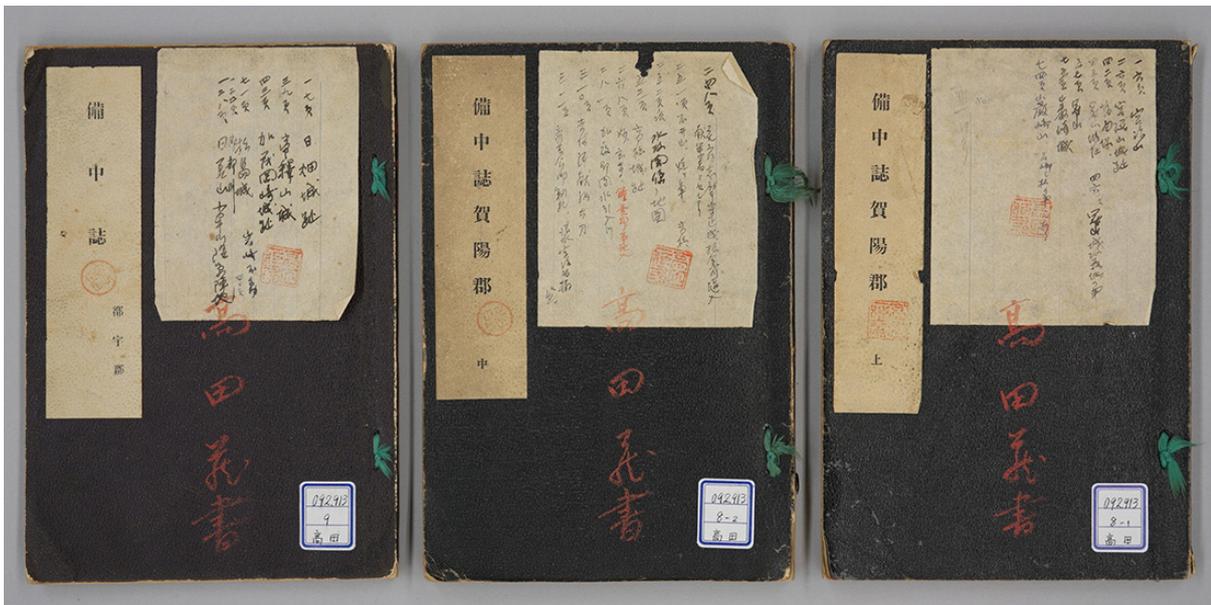
5-4 永山卯三郎（著）「備中高松の水攻に就いて」

『岡山師範学校校友誌』大正8年（発行）、36～49頁

22.5cm × 15.3cm 26頁

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/8）

岡山師範学校で教え、『岡山県政史』や『倉敷市史』を著した地元の歴史家、永山卯三郎氏による高松戦役の先駆的な研究論文です。雑誌から抜粋した原本の前には高田馬治が手書きした太閤真蹟記からの引用文と表紙がつけられています。あちこちに記念スタンプが捺されているとおり、彼は、大正15年に行啓した摂政宮（後の昭和天皇）の案内にあたって、この論文を大いに参考にしたとのこと、朱文字で数々の註記が施されています。



5-5 岡山県（編）『備中誌 賀陽郡』上巻、中巻、『備中誌 都宇郡』
 賀陽郡の2冊は明治37年（発行）、都宇郡は明治35年（発行）
 いずれも22.0cm × 15.0cm
 岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.913/8-1,2、092.913/9）
 岡山県が編纂した郡ごとの地域史を、高田馬治は多数の書き入れをしながら細かく読み込んでいます。

6 普及活動

備中高松城が史蹟指定を受け、広く知られていくにつれて、全国から来訪者を迎えるようになりました。高松町や高松城址保興会などが中心になって城址を整備する中で、史蹟の由来を説明する案内パンフレットも作成され、高田馬治はその解説文を執筆しました。パンフレットには史蹟に指定された昭和4年を境にしてそのことが記載されるようになり、指定が地域の保存活動を後押ししたことがうかがえます。

史蹟指定と、昭和5年の陸軍特別大演習における高田馬治の御前講演のあと、地域の人々がめざしたのは、NHK放送局から高田馬治の講演をラジオの電波にのせて全国へ中継することでした。そのため高松町長をはじめとする町の要人がたびたび放送局と掛け合い、中継の実現を目指して粘り強い交渉を行っています。

ここには昭和7年と昭和13年に、それぞれ岡山放送局と広島放送局から全国へ放送された高田馬治のラジオ講演の原稿を、活字に起こして刊行された書物(6-5と6-6)も展示しています。

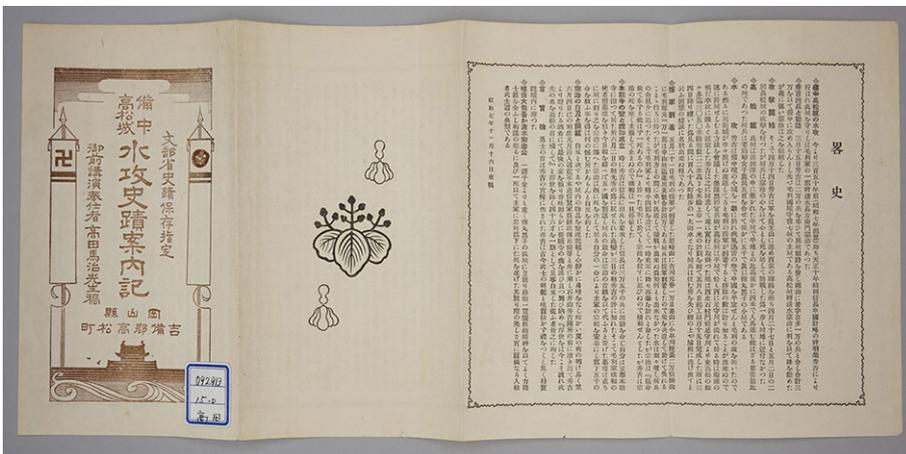
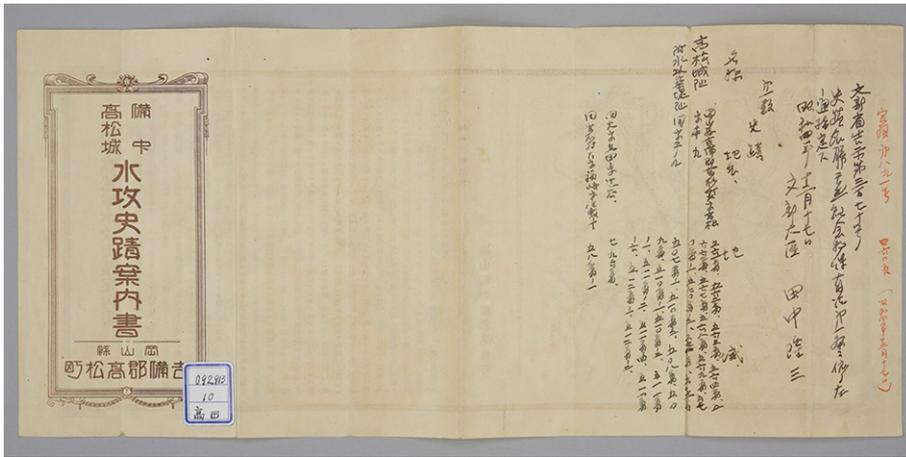
矢田挿雲や、山岡莊八、吉川英治、司馬遼太郎など、歴史小説の作家たちも高松城址を訪れて水攻め合戦の昔を取材し、創作に生かしていきました。影響力のある文筆家との交友を深めることも高田馬治をはじめとする高松の人々が取り組んできたことで、史蹟の魅力と意義を伝えるために大切にされてきました。

そして団体旅行客や視察で訪れた人々への案内も熱心に行われています。ここには第11回水道協会総会が岡山市で開催された折に高松城址へも行われた視察のため、高田馬治が作製した謄写版刷の冊子(6-3)を展示しています。高松城と水攻合戦の由来を簡潔に記しているほか、高松の平野を囲む山並みを描き、どこにどのような史蹟があるかを図示したものです。

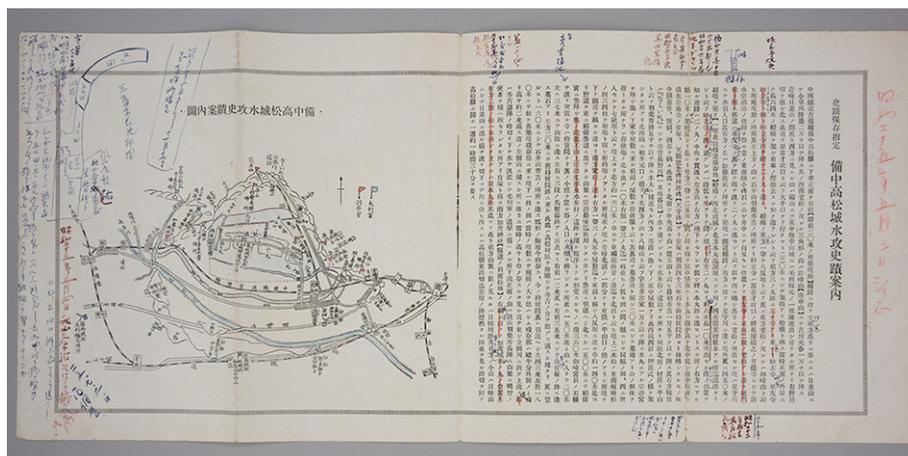
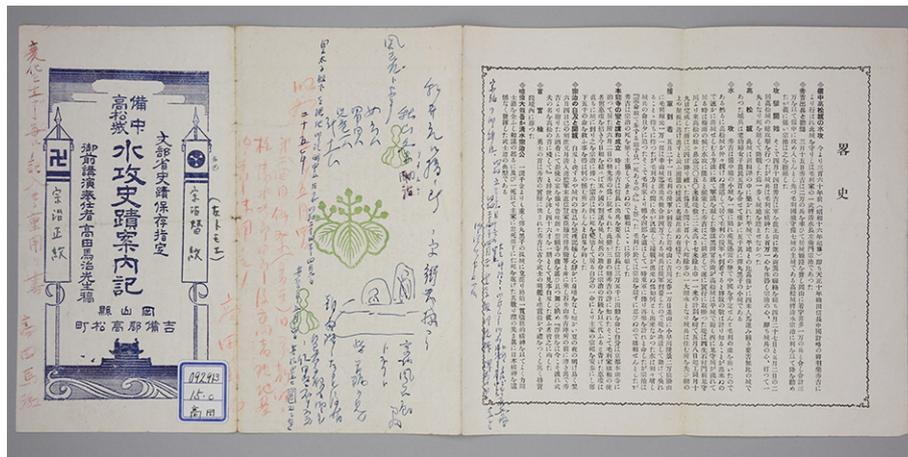
遡れば御前講演の折にも、それが終わったとき奈良武官長から、なお何か申し上げることはないかと問われ、高田馬治は汽車の窓から見える史蹟について、その見所の説明を述べ添えたことが思い合わされます。

なお、高松では城址だけが文人の関心を引いてきたわけではありません。北方に聳える龍王山を主峰とする、高松の平野を囲む山並みの美しさも古くから知られており、小野田嘉久二が明治43年に著した案内書『備中高松遊覧の栞』でも高らかにうたわれていました。

いまでも高松平野とそれを囲む山並みは、史蹟保存への努力もあって風光明媚な自然の景観を比較的良好に保っているといえますが、本書71頁に紹介した高田馬治のノートの一部や、大正15年に皇太子(後の昭和天皇)の行啓に際して献上した写真帖の写真(本書23頁)からは、現代の開発が及ぶ前の山並みの美しさを想像することができます。



6-1 高松町（編）
『備中高松城水攻史蹟案内書』
『備中高松城水攻史蹟案内記』
昭和3年、昭和7年
いずれも17.8cm × 38.8cm
岡山市立中央図書館蔵
(高田文庫 092.913/10, 15)
昭和4年の史蹟指定を経て、
そのことが表紙に書き加えら
れています。史蹟指定は保存
に携わった地域の人々にとり
大きな後押しとなりました。

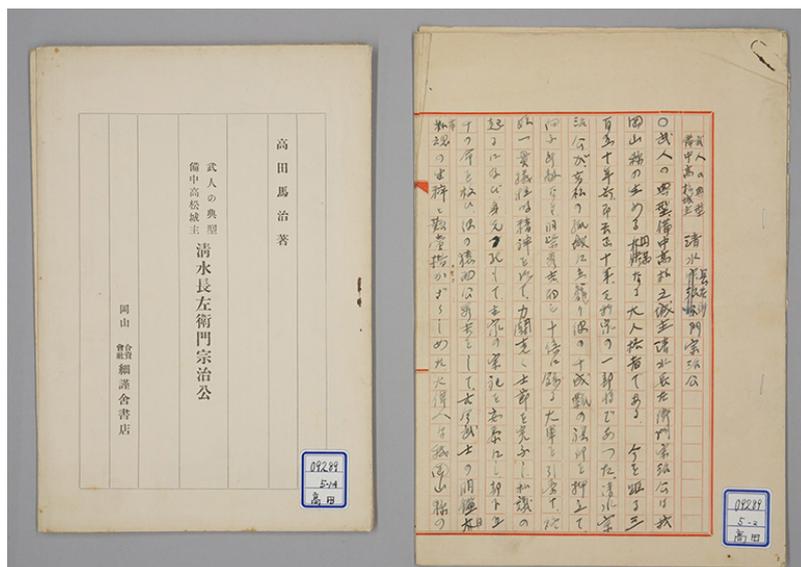


6-2 高松町（編）『備中高松城水攻史蹟案内記』

作成年の記載なし 18.0cm × 39.0cm 1枚

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.913/15）

パンフレットは版を重ねましたが、高田馬治は自分が執筆した解説文へ改訂のたびに細かい修正を加えています。



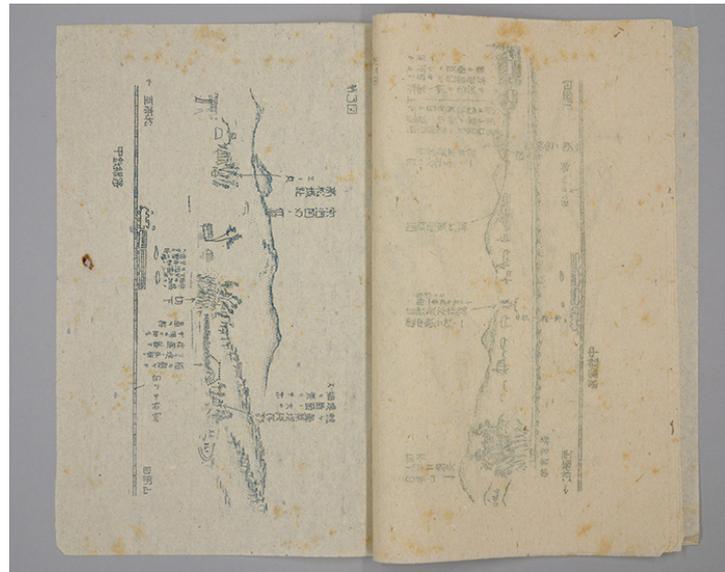
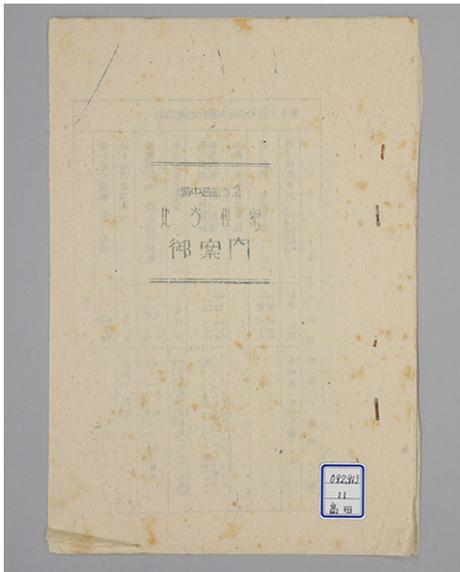
6-4 高田馬治（著）『武人の典型備中高松城主清水長左衛門宗治公』とその原稿

昭和7年3月15日、細謹舎書店（発行）

（刊本）22.6cm × 15.5cm （原稿）25.0cm × 17.0cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.89/5）

御前講演の内容を広く紹介するために、その翌々年に岡山の書店から発行された冊子です。

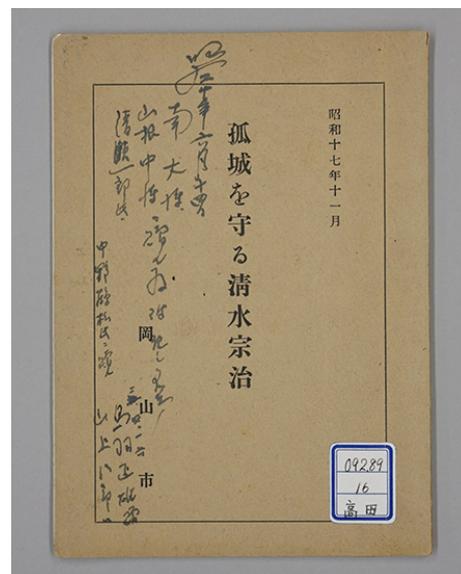
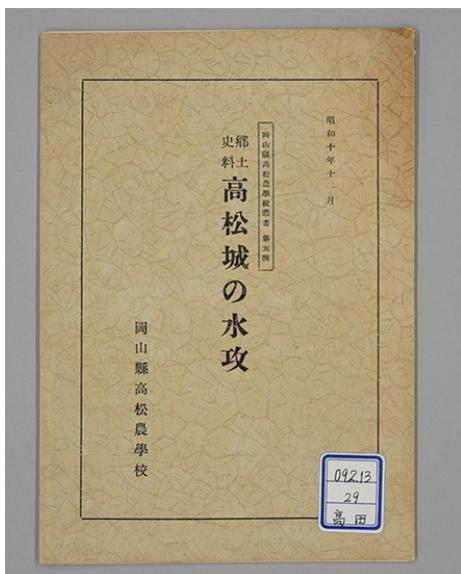


6-3 高田馬治（編）『備中高松方面地方視察御案内』

昭和17年11月13日 26.2cm×17.8cm 6丁

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.913/11）

岡山市で開催された第11回水道協会総会で、大原美術館、吉備津神社、備中高松城への視察が行われました。謄写版摺のこの簡易な冊子は高松城址の説明のために高田馬治が作成したものです。上右図の頁には、城址のある平野から見える風景がイラストで解説されています。



6-5 高田馬治（著）『郷土史料 高松城の水攻』

昭和10年11月16日（初版）、昭和13年5月15日（再版）

18.7cm×13.1cm 18頁および付図2枚

岡山県高松農学校（発行）

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/29）

昭和7年に日本放送協会の岡山放送局から全国放送されたラジオ講演の原稿を活字化したものです。

6-6 高田馬治（著）『孤城を守る清水宗治』

昭和17年11月、岡山市（発行）

18.2cm×13.0cm 19頁

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.89/16）

昭和13年に日本放送協会の広島放送局から全国放送されたラジオ講演の原稿を活字化したものです。

7 地図・絵図と実測図

岡山市立中央図書館で保存されている高田馬治関係資料（高田文庫）には、ここに展示した絵図の写しや実測図のほかにも、縦 158cm×横 550cmに及ぶ水攻め堤防の遺構の実測調査図や、縦 183cm×横 195cmに達する高松村の明治時代初期の地引絵図の写しなどが含まれているのですが、薄くて破れやすい紙に描かれている上に、大きくて展示ケースへの収納が困難であったため、今回の出品は見送られました。

しかしここに展示した数々の図をみただけでも、高田馬治が古い絵図を写し取り、あるいは土地の広さや高低にかかわる実測値を図化することで、水攻め合戦の舞台である土地の客観的な把握を試みていたことが伝わってきます。

それらは大きく分けて、高松町役場にあった地籍図を写し取ったものと、各地の所蔵家や図書館などで保管されていた古い絵図を書き写したものと、高松戦役を説明するために高田馬治自身が作成した歴史地図と、城址や水攻堤防の遺構の形状や土地の高低を現地で調べた実測図などからなっています。

それらの中には四隅に画鋲の穴がいくつも空いているものがあり、中でも 7-1 の『中国役一般図』は四隅の裏側に三角形の紙を貼って補強が行われています。所蔵する資料を展示する機会や、請われて各地で高松城水攻に関する講演を行った際などに、自身が研究のために作成したこれらの図の多くが掲示されて活用されたことを示しています。

しかしそれらは高田馬治が自身の研究のために書き写したものなので、先々まで永く保存できるような材質の紙が用いられているわけではありません。原図をトレースした場合があったかどうか確認できませんが、たいていは下に敷いた紙の図柄が透けて見えるような薄い紙に描かれています。それらは大正から昭和にかけてのトレース紙なので、繊維が短く、経年劣化すると破れやすくなるものです。それらの利活用を図りながら、あわせてどのようにして保存していくか、これからの課題であるといえます。

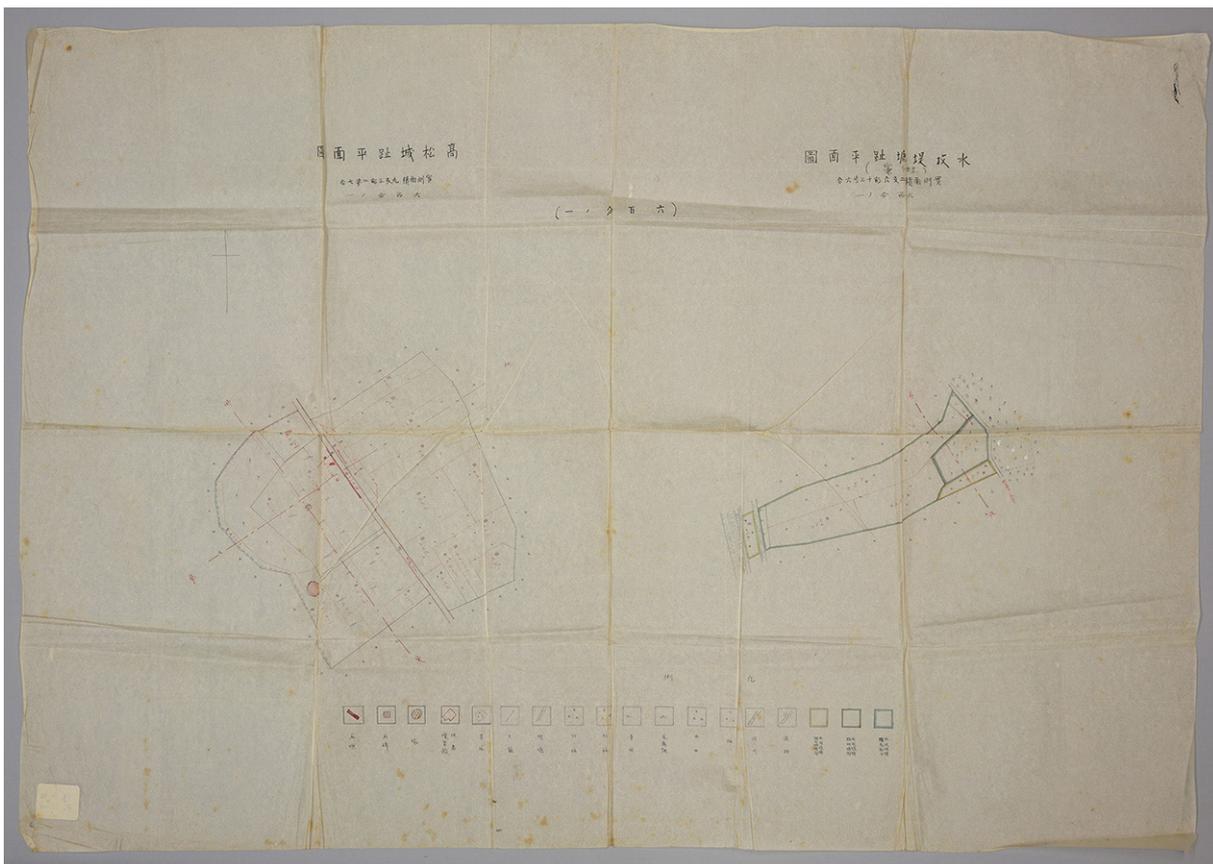


7-1 高田馬治『中国役一般図』

作成年の記載なし 76.5cm × 173.5cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.1/1）

中国地方における織田方と毛利方の攻防を1枚にまとめた図です。これに限らず彼が書写または作成した多くの図には四隅に画鋺の穴があります。昭和32年に水島自衛隊へ貸与され、現地講演で使用された旨が裏面に書かれています。

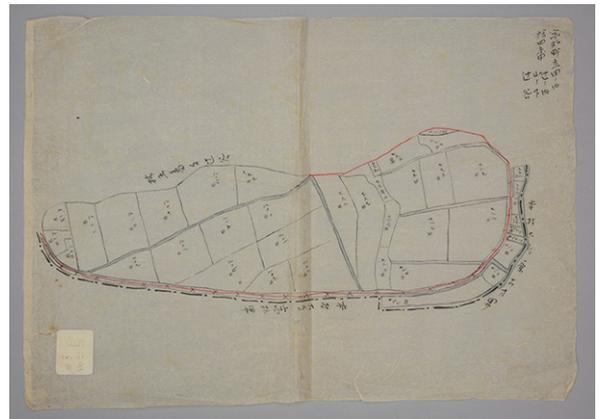
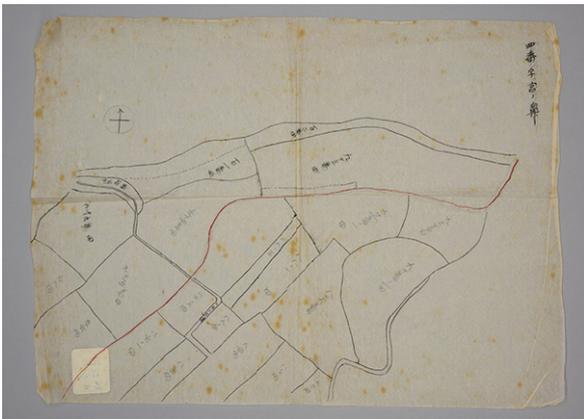
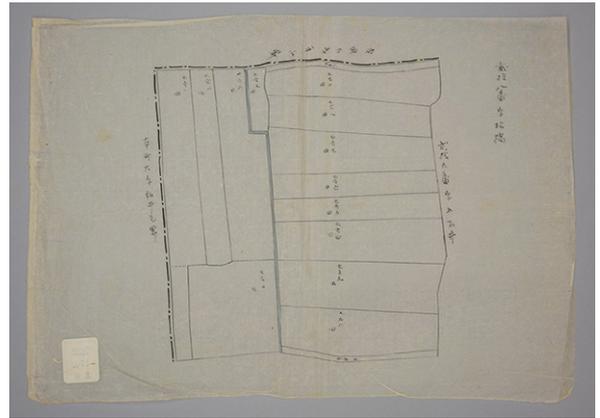
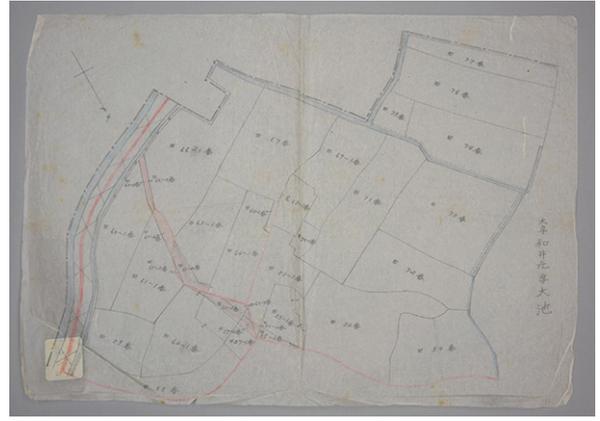
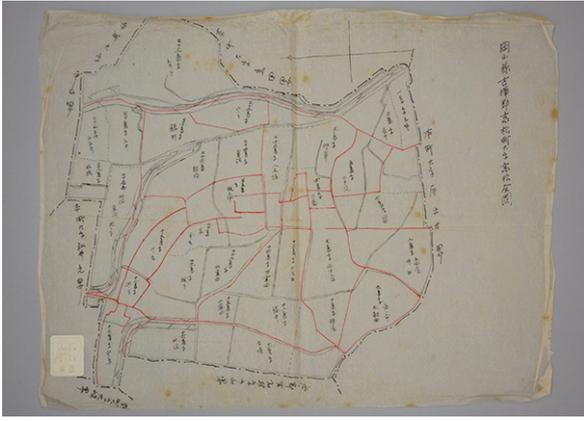


7-2 高田馬治『高松城跡及水攻堤塘跡平面図』

作成年の記載なし 54.5cm × 78.0cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/17-2）

次頁に6枚を掲出した高松町の地籍図の写しと一緒に保管されてきたものですが、これはそれらと異なり、史蹟に指定された高松城址と水攻堤防の残存部の遺構の図です。内容が共通しているので、昭和4年の史蹟指定と関連する可能性も考えられますが、この図そのものにそのことを明示する書き入れはありません。



7-2 高田馬治 (写)「高松町の地籍図の写し」

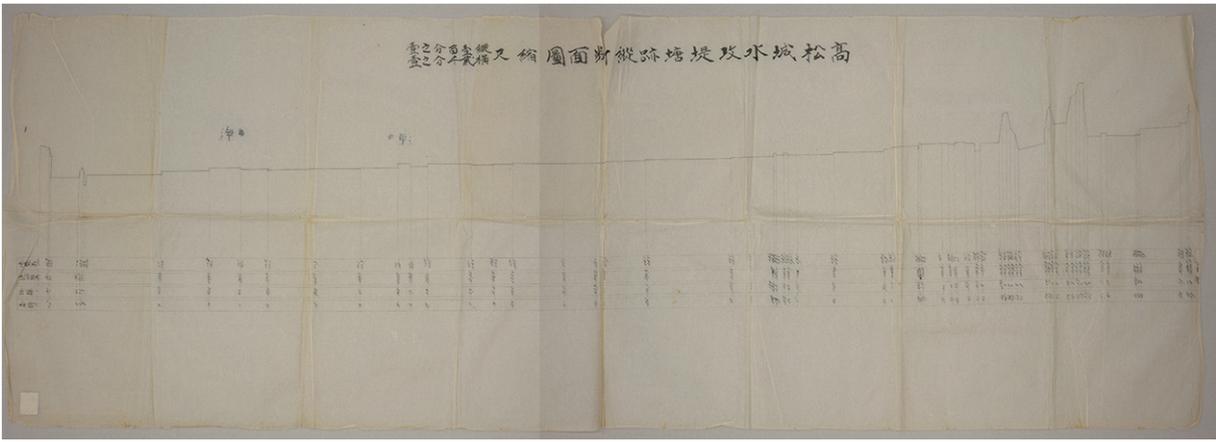
作成年の記載なし

(左上の高松町の全体図) 26.5cm × 35.0cm

(大字ごとに描かれた他の図) おおむね 24.5cm × 33.0cm

岡山市立中央図書館蔵 (高田文庫 092.13/17-7, 8, 9, 10, 11, 12)

ここに掲出した6枚の図は、高松町役場で保管されていた明治初期の多数の地籍図を高田馬治が書き写したものの一部で、このほかにもまだまだ多くの地籍図の書写があります。こうした努力の積み重ねでさまざまな所有者・形状の土地が把握され、歴史の研究や史蹟指定の申請に結実したことがわかります。ここに掲出した6点の中から、展示ではさらに4点を選んで紹介しました。

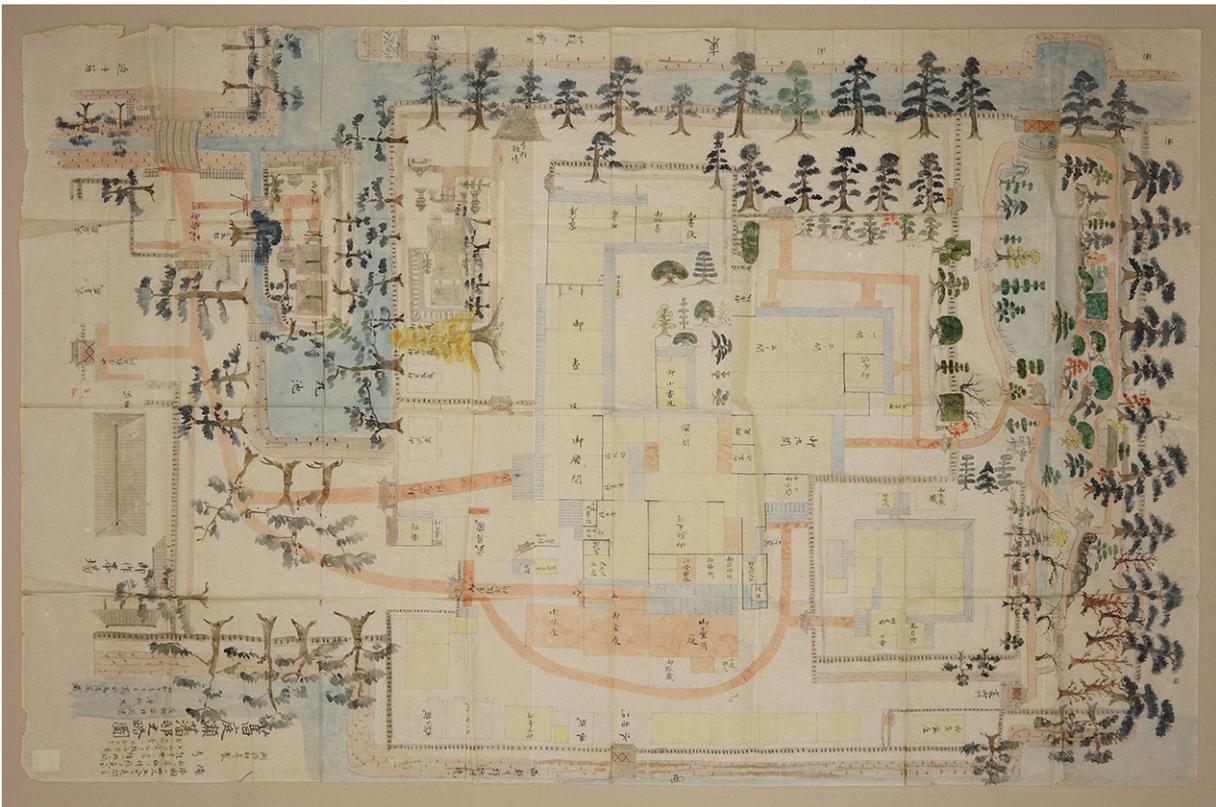


7-3 高田馬治『高松城水攻堤跡縦断面図』

作成年の記載なし 52.0cm × 153.0cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/23）

高田馬治が水攻め堤防の遺構と考えた地帯について高低差を実測し、1枚の図面にまとめたものです。

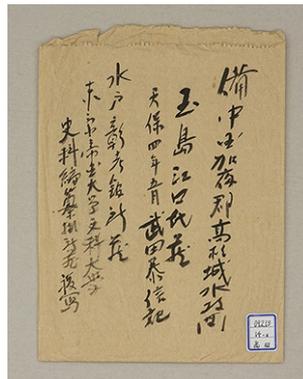
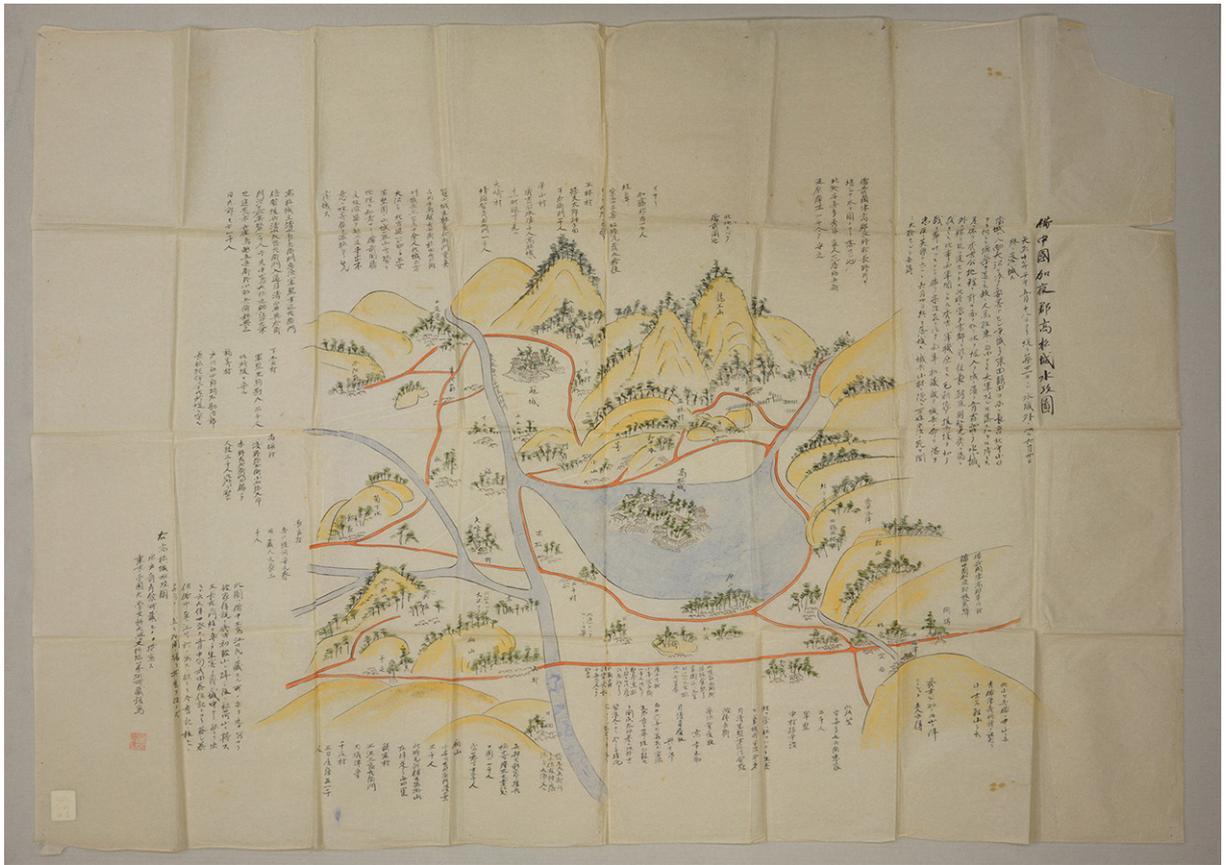


7-4 高田馬治（写）『旧庭瀬藩邸之略図』

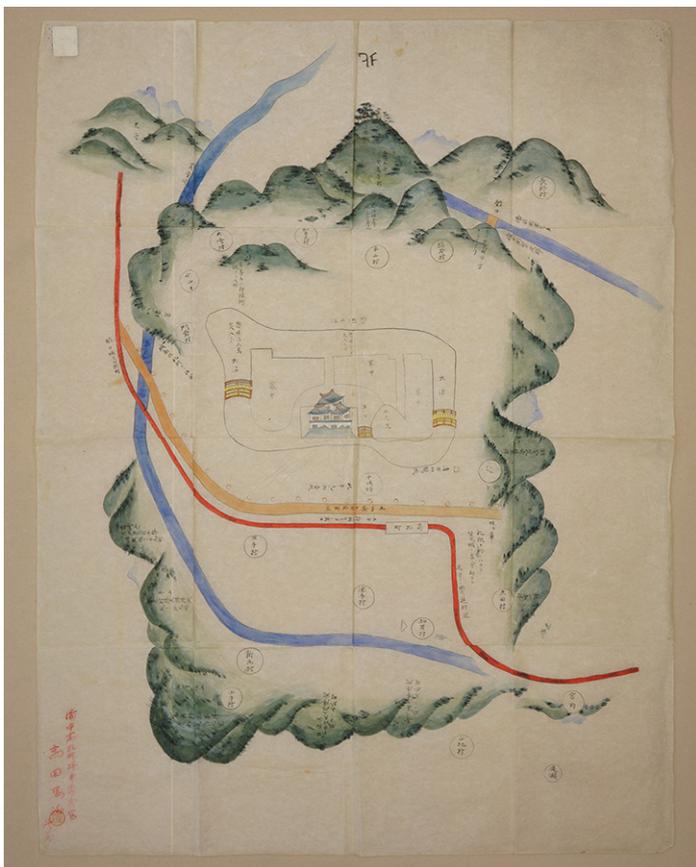
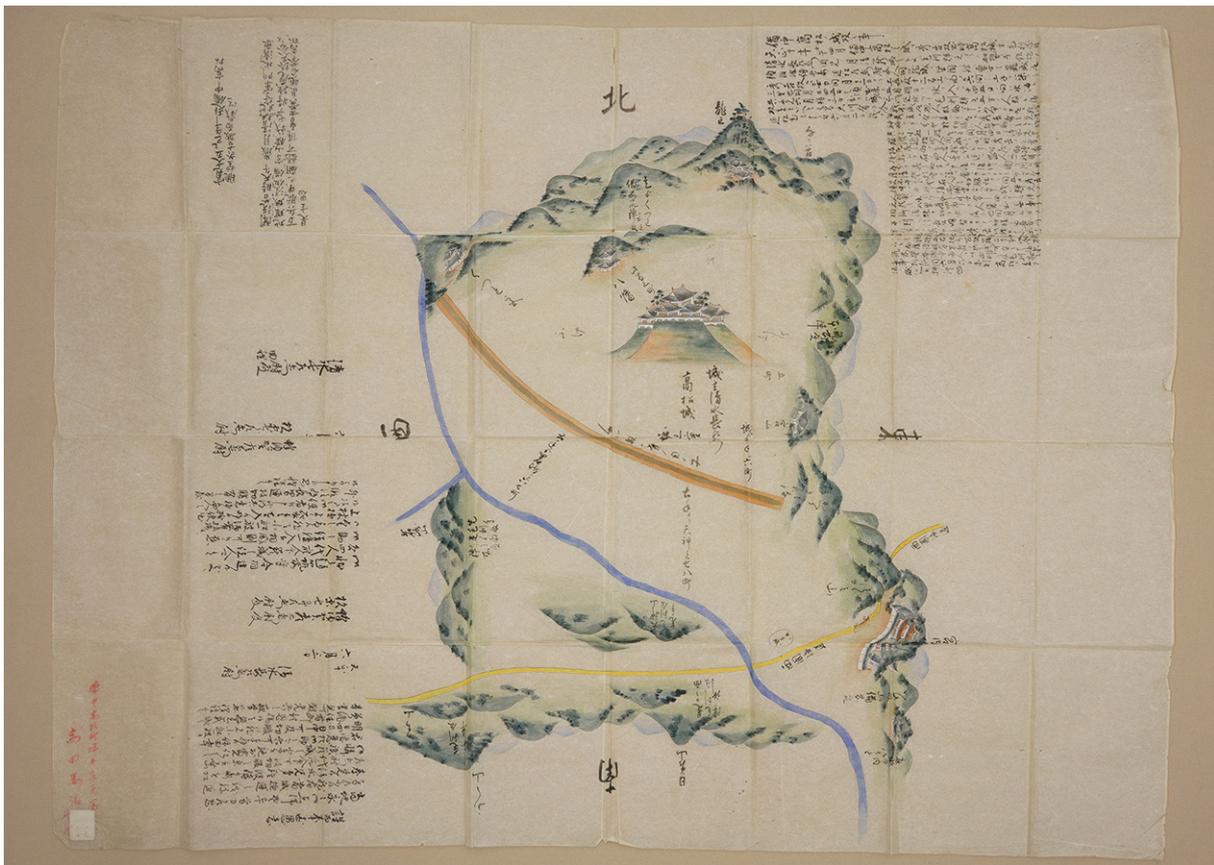
（原図）明治初年製、昭和10年（写） 122.2cm × 79.2cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 095.21/1）

これは、庭瀬の西村氏が所蔵する明治初年の図を、平松という人が写したものを、高田馬治が書写した図です。毛利氏が高松の平野を決戦場を選んだとき、付近に位置する庭瀬城も支城の一つとなったため、その城址へ後になって建てられた庭瀬藩邸の図を、高田馬治は描き写したものと考えられます。



7-5 高田馬治(写)『備中加夜郡高松城水攻図』と袋
 作成年の記載なし(絵図)78.5cm×109.7cm(袋)24.5cm×178cm
 岡山市立中央図書館蔵(高田文庫092.13/14-1,2)
 備中玉島の江口氏が所蔵する高松戦役の図を、武田泰信という人が天保4年に書
 写して、水戸の彰考館に所蔵されていたものの写しが東京帝国大学史料編纂掛に
 所蔵されていたのを高田馬治が書写した図です。この図の左下と収納していた上
 袋には、そうした経緯が丁寧に書き記されています。袋の裏面には藤井駿氏(岡
 山大学教授、中世史学)に貸与されたことがある旨も書かれています。



7-6 高田馬治 (写)『備中高松城水攻図』

(上の図) 寛文5年 79.2cm × 105.7cm

(左の図) 作成年の記載なし 79.7cm × 60.7cm

岡山市立中央図書館蔵 (高田文庫 092.13/40-1,2)

この2枚の図は、大正8年に備中高松の坪井家が所蔵していた高松戦役の古図の貸与を受け、書写したものです。いずれも昭和24年4月2日の皇太子(現在の皇)の高松城址訪問に際して、高田馬治の案内で台覧に供されました。この一部が写されて、昭和4年の史蹟指定にも生かされているようです(17頁の上の図)。

8 考古資料

高松城址や付近の陣所の遺跡などから発掘または採取された瓦や瓶（甕）などの破片からなる考古資料は、文書や写真などからなる他の資料と一括で昭和61年に遺族から岡山市立中央図書館へ寄贈された後に、岡山市埋蔵文化財センターへ移されて管理されています。

それらは城址にあった建物の瓦の破片や、そこから出土した瓶や播鉢の断片ですが、小さなかけらでも、それらがいつ、どのような場所で出土した（採取された）かが書き添えられています。

もとより高田馬治は専門の機関で考古学を基礎から学んではいないので、現代において組織的に行われる学術的な発掘調査の方法と比較して当否を論ずることはできませんが、遺物が発見されたときの状況を彼なりの方法で丹念に記録し、説明できるようにしています。遺物を包んで保管してきた紙片や、それらを収納していた紙箱の表面にも、採取したときの経緯が細かい文字でびっしり書かれており、中には時期を変えて幾たびも書き足されている記述があって少し当惑も覚えそうですが、ひたむきな気持ちで書かれていることが伝わってきます。こうしたひとつひとつの遺物が、高田馬治の探求の歩みと重なっています。

高松宮や皇太子などの皇族や他の要人が高松城址を訪れたとき、高田馬治は案内の役を務めました。そのときに台覧に供され、彼が説明を言上した旨が記されている資料も、保存されてきた考古資料の中にはしばしば含まれています。それぞれの書き入れには、そうした晴れの機会に浴したことへの素直な感激が述べられているとともに、要人に説明することで社会の注目を集め、高松城のことが報道にも取り上げられて広く普及して行くことの大切さを考えていた点を、思いあわせる必要があります。また、そうした著名人に限らない、高松を訪れた数多くの人々のためにも、高田馬治は史蹟や遺物を説明して城址の意義と魅力を説いて倦むことがありませんでした。彼が集めた資料は彼自身の研究のみならず、城址の意義と大切さを広く伝えるために役立てられてきました。



8.4cm × 14.2cm



(左) 7.3cm × 5.1cm

(右) 5.6cm × 6.8cm



(左) 11.0cm × 7.0cm

(中) 13.2cm × 12.6cm

(右) 10.3cm × 5.5cm



(上) 6.0cm × 6.0cm

(下) 5.5cm × 8.7cm

8-1 穴戸豊前守墓出土 骨瓶と播鉢等破片 (合計 8 点)

昭和 40 年 5 月 4 日発掘

岡山市埋蔵文化財センター蔵 (高田馬治資料 2)

高田馬治と清水忠俊氏の立ち合いで三宅二郎氏が発掘したものの記載があり、岩崎山に布陣した毛利氏の将、穴戸豊前守の墓の埋納品です。上の 1 点が瓶 (甕) の破片、ほかは備前焼の播鉢や壺の破片のようです。



8-2 高松城本丸出土の瓦片（4点）と円筒埴輪片（1点）

それぞれ昭和前半期に採取

岡山市埋蔵文化財センター蔵（高田馬治資料3）

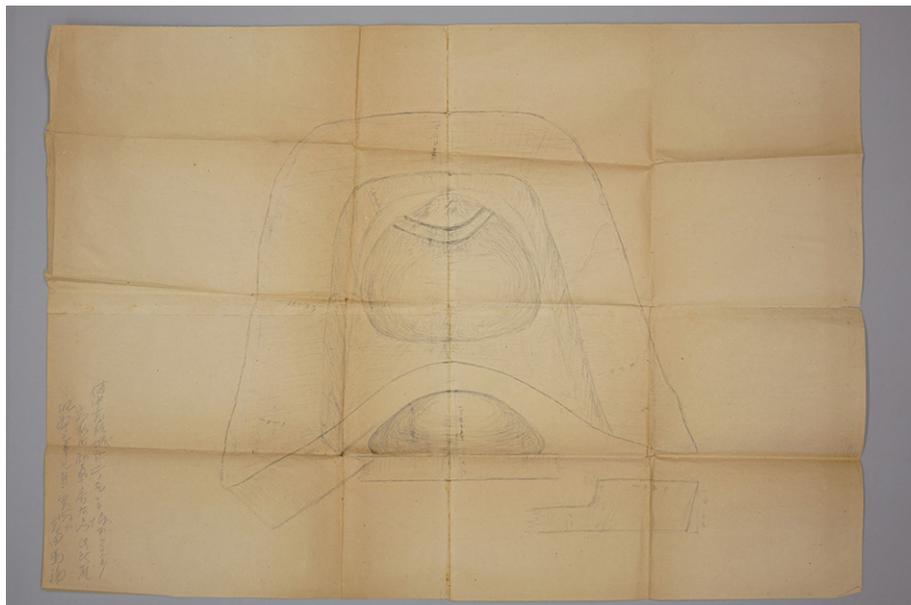
（上左）本丸北側で採取。幅 13.9cm、奥行 10.0cm

（上右）昭和24年4月1日に本丸趾で採取された軒丸瓦の破片で、翌日に城址を訪れた皇太子（現在の天皇）への台覧に供されました。瓦片の裏側には折よい発見への感激が書き入れられています。径 12.0cm

（下左）昭和11年に本丸にかかる橋の南で採取。5.6m × 7.7cm

（下中）昭和9年6月3日に高松宮夫妻の台覧に供されたことが記されています。16.0cm × 15.5cm

（下右）昭和3年3月3日に採取された円筒埴輪の断片です。古墳のある付近の山から本丸へ運び込まれた盛土に混じていたのかもしれませんが。5.3cm × 7.6cm



8-4 高田馬治（実測）「高松城二之丸瓦の図」

昭和17年7月（作成） 45.0cm × 62.5cm

岡山市立中央図書館蔵（高田文庫 092.13/55）

高松城二の丸趾で掘り出され、高松町の和気房右衛門氏のもとで保管されていた瓦を、昭和17年7月に高田馬治が訪れて実測した図です。



右下の軒丸瓦片の表側

8-3 高松城二の丸出土 瓦片 (4点)

採取時期不詳

岡山市埋蔵文化財センター蔵 (高田馬治資料 4)

二の丸跡で採取された平瓦、軒丸瓦片、鬼瓦片などです。

(上左) 一部に破損がありますが、ほぼ完全に近い平瓦です。賀陽宮の台覧 (昭和 14 年 8 月) に供されたことが朱文字で記されています。25.5cm × 21.3cm、厚さ 1.8cm

(上右) 葉紋が浮き彫りされている鬼瓦片です。14.5cm × 12.7cm、厚さ 4.2cm

(下左) 二枚合わせて焼かれている瓦の断片で、昭和 27 年 4 月 2 日に皇太子行啓の三周年に採取された旨が書き記されています。20.0cm × 20.0cm、厚さ 2.2cm

(下右) 軒丸瓦の先端の断片で、昭和 8 年 9 月 18 日の日付が書かれています。13.2cm × 7.6cm、厚さ 3.3cm

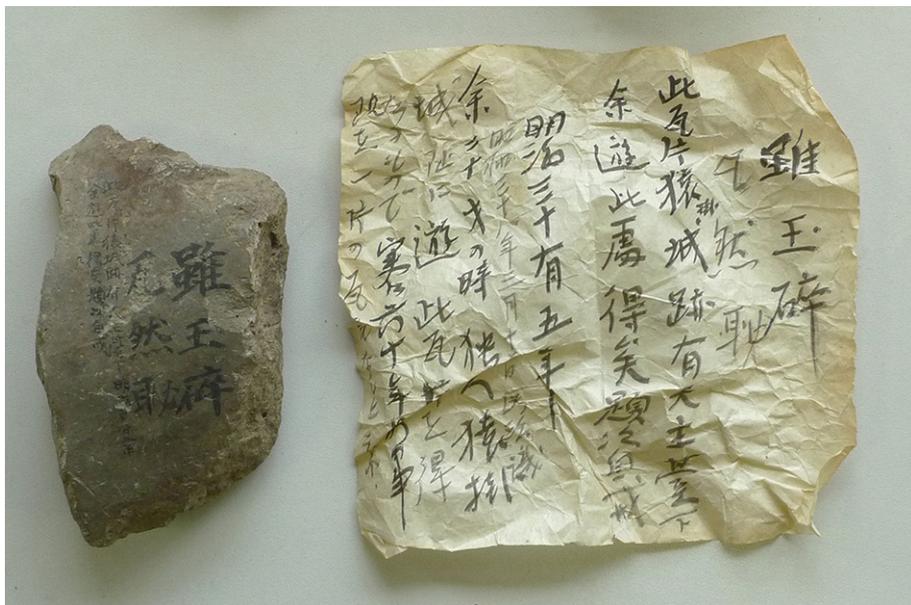


8-5 水瓶破片 (2点)

採集時期不詳 (左) 12.5cm × 27.0cm、(右) 14.0cm × 17.0cm

岡山市埋蔵文化財センター蔵 (高田馬治資料 5)

備前焼の大甕の、口縁部の破片です。少し形状が異なるので、別個体からのもののようにみえます。なお、高田馬治は甕 (かめ) を指すのに一貫して瓶 (かめ) の文字を用いているので、本展 (本書) でもそれに従っています。



8-6 猿掛城出土 瓦片 (1点)

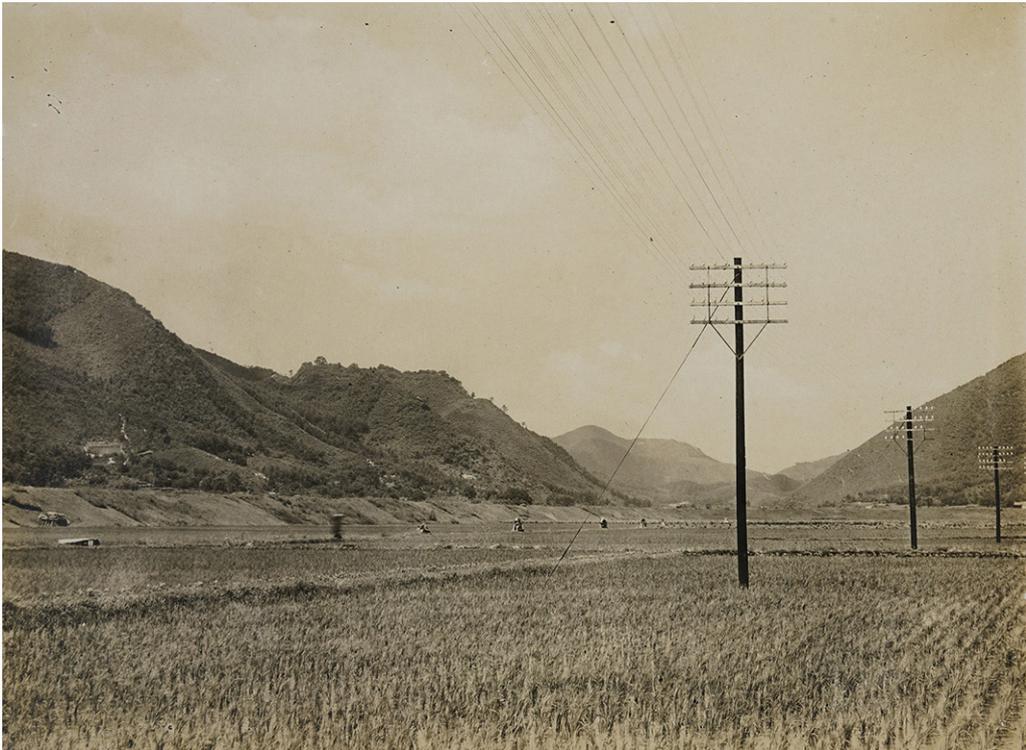
明治 35 年採集 8.8cm × 5.0cm

岡山市埋蔵文化財センター蔵 (高田馬治資料 6)

毛利輝元が布陣した猿掛城址で採集された瓦片です。高田馬治は昭和 38 年 3 月 13 日に書き添えた紙片に、「余二十才の時 (=明治 35 年)、独人猿掛城陸に遊 (び) 此の瓦片を得たるもので実に六十年前の事。現在一片の瓦もなしと云ふ」と記しています。



(左から) 猿掛城址、黒宮大塚、石田城址
撮影年の記載なし
岡山市立中央図書館蔵 (高田文庫 092.13/61-1)
毛利軍の陣所になった地帯を望んで撮影された写真です。



猿掛城址
撮影年の記載なし
岡山市立中央図書館蔵 (高田文庫 092.13/61-2)
毛利輝元が陣を構えた猿掛城址も、高田馬治は青年の時からたびたび訪れています。前頁の8-6は、ここで採取された瓦片です。